

大聖堂のある街で

第5話 カスミの秘密



堀田耕介

カスミの秘密

金曜日の朝、ぼくが学校に出かけようとして靴を履いていると、玄関のドアを開けてえっちゃんが入ってきた。

「どうしたの？」

えっちゃんの顔がいつもと違う。無言なんだけど、何かを言おうとしている。

「お父さんに用事？」

えっちゃんは首を振った。

「今日学校でしょ？制服着て、ここまで遠回りしてきたの？」

「カスミちゃんに会うの、やめたほうがいい。」

えっちゃんは強い声でそう言った。ぼくはびっくりした。

「どうして？」

「ごめんなさい。まだ時間大丈夫よね。ちょっとユキちゃんの部屋で話そう。」

えっちゃんは勝手に靴を脱いで、すたすたとぼくの部屋に入っていく。ぼくもあわてて靴を脱いで追

いかけた。えっちゃんは大聖堂の見える窓辺に腰を下ろして、窓から外を見た。でも、本当は何も見えないように見えた。

「どうしたの、えっちゃん。そりゃ、カスミちゃんと会ったこと、内緒にしてたのはいけなかったかもしれないけど、カスミちゃん、いい人だし。」

ぼくが話し出すとえっちゃんはぴしゃりとぼくの言葉を遮った。

「ユキちゃんはカスミちゃんがどういう人だか知らないのよ。」

「どういう人って？」

ぼくはえっちゃんの剣幕に少ししどろもどろになっ
てしまった。

「あの子はね…あの子は。」

えっちゃんは下を向いて、両手で顔を覆った。その
まま黙ってしまったのでぼくは困った。

「えっちゃんもきのう、植物園に来てたんでしょ。だ
れと来てたの？不思議なおじさんと話してたけ
ど。」

「あの方は関係ないのよ。それに私のこと言ってる

んじゃないの。あなたとカスミちゃんのことよ。」

えっちゃんはきつという顔をしてぼくの方を見た。

ぼくはおどおどしながらもちよつとむつとして言った。

「何がいけないのさ。ぼくが12歳で、カスミちゃんが16歳だから？そんなの、えっちゃんだってこの間一緒に帰ったとき、デートみたいだねって言ってたじゃない。いまは小学生と高校生かもしれないけどさ、4つくらい……」

「そんなこと言ってるんじゃないわ。」

えっちゃんはまだ目をそらした。

「じゃあ、なんで…」

「あの子は、女の子としか付き合わないのよ。」

ぼくはその意味が最初わからなかった。

「うん、おともだちは女の子ばかりだって言うてた。」

えっちゃんははあっと息を吐いた。

「そうか、ユキちゃんに言っても分からないかもしれないな。」

「え？なにになに？…どっついついつと？」

「あのね、よく聞いて。」

えっちゃんはおくの近くに顔を突き出して言った。

「あの子は、女の子しか好きになれない子なの。」

30秒くらいおくはその言葉の意味を考えた気がする。でも本当は5、6秒だったと思う。

「ええっ?」

「やっとわかった?」

「でも、じゃあ、どうして?」

「さあ、私には分からない。でも、あの子がそういう

子だって言うのは、セブではみんな知ってることなのよ。中学生のとき、最初にあの子が付き合った子は私と同じクラスの子だったし、その子と別れてから付き合ったのは画材屋のお姉さん。それからついこの間まで、ずっと年上の、卒業生の市役所づとめの人と付き合ってたの、私知ってる。私だって憧れてた人だったから。」

ぼくは急に思い当たった。

「あれ、その人って…いずみさん？」

えっちゃんは、ぼくの顔をまじまじと見て言った。

「何で知ってるの？」

「カスミちゃんがそんなこと言ってたから。それにぼく、いずみさんと会ったことある。」

「ええ？どういふことよ。」

それでぼくはラプラス通りの本屋さんで、カスミちゃんといずみさんと最初に会ったときの話をした。えっちゃんは考え込んだ。

「そうよね、今年の春までは、あの人たち街でよく見かけたもの。そのあと分かれたんだわ。」

「あー！」

ぼくは急に思い当たった。あるときだ。海で会ったとき、カスミは誰かとケンカしたって言ってた。あの時いずみさんと…

「どうしたの。」

ぼくはえっちゃんにこれ以上カスミのことを言いたくなかった。

「なんでもないよ。」

「言いなさいよ。」

「なんでもない！」

ぼくはつい大声を出してしまった。えっちゃんはび

くつとした。

「大きな声出さないでよ。お兄ちゃんが起きちゃう。」

「なんでもない。」

ぼくは下を向いてつぶやいた。なんでもないはずなんてない。

「いいわ。言いたくないなら言わなくて。でもユキちゃん、これだけは覚えておいて。あなたはきれいだから、あなたは子どもだから、だからカスミちゃんはあなたと会う気になったんだわ。女の子と会うのと

同じなのよ。でもユキちゃん、あなたはこれから男らしくなる。大人になるの。そうしたらきつと、あの人はあなたから離れていく。あなたは女の子じゃないんだから。」

ぼくは下を向いた。唇が震えているのが分かった。

「そんなこと分からないじゃないか！」

ぼくは下を向いた。涙がこぼれそうになった。えっちゃんの下を向いて、座り込んでしまった。

「ごめんなさい。そんなこと、私が決めることじゃない

いわね。でも、私、頭にきたの。ユキちゃんをおもちやにするなんて。」

「ぼくはおもちやなんかじゃない！」

ぼくは部屋を飛び出した。えっちゃんにだって、そんな好き勝手なことには言わせない。ぼくは玄関を飛び出して、一気に階段を下った。えっちゃんは途中までぼくの名前を言いながら追いかけてきたけど、途中から音がしなくなった。ぼくはかまわず、学校まで走った。

「おい、ユキ、どうした？」

一階の下で待っていたしんちゃんが驚いて追いかけてくる。ぼくはかまわず走り続けた。はあはあ言っているうちに、呼吸に血の味が混じってくるのを感じた。

エリオットの丘

ぼくはお昼の鐘が鳴ると学校を飛び出し、一目散に旧市街の裏に広がるエリオットの丘に向かって駆け出した。旧市街が終わって丘陵のはじまると

ころにはケーブルカーの駅がある。ぼくは半ズボンのポケットから小銭を取り出し、ケーブルカーの改札に突っ込んで発車間際のケーブルカーに飛び乗った。乗客はほかに二人。サングラスをかけたひげもじやの男の人と、長い髪の毛をした何をやっていいのか分からない感じの女の人だ。ぼくはケーブルカーの一番下の席に座って、街を眺めた。ケーブルカーが上がっていくと街がスーツと小さくなっていく。旧市街の石造りの街並みが見えて、その真ん中に大聖堂のトンがり屋根。それもだんだん小さ

くなくて、川の向こうに新市街。そしてやがて海が、大きな入江が見えてくる。

「そういえば」とぼくは思った。お母さんがいなくなつたときも、ぼくはケーブルカーに乗って丘に上つて、街を見に行つたんだ。冬の寒い、雪の降つた日だつた。日が暮れても街に帰る気にならず、丘の上の美術館の裏の小さな無人の小屋で無断で寝てた。街の人たちが探しに来て、お父さんといっちゃんを迎えに来てくれた。あれは3年か、4年前。結局お母さんは帰ってこなかった。お父さんも、いっちゃん

も、ぼくのことを叱らなかつた。ただただ街の人たちに謝っていた。あの時と同じことを、ぼくはしている。もう12歳なのに。

やがてケーブルカーは終点に着いた。二人連れはケーブルカーを降りると煙草をくわえ、二人で煙を吐きながら美術館の方へ向かった。ぼくはケーブルカーを降りて、街が見える丘の端の展望台に行った。きらきらする海が見える。大聖堂があんなに小さい。ぼくたちの街も、旧市街も新市街も合わせて、こんなに小さいんだと思う。ぼくはカスミのこ

とを考えていた。えっちゃんのこととも考えていた。お
かあさんのことも考えていた。何を考えればいいの
かわからなかった。ぼくは溜息をついて、眼を覆っ
た。

「おおー！」

どこかで歓声が上がった。どうしたんだろう。ぼく
は目を上げた。上空で何か音がする。見上げると、
そこに長大な連凧が上がっていた。連凧は少しずつ
空に放たれ、どんどん長くなっていった。一杯
に風を受けて、何百、何千もの凧が街に向かって

続いていた。

「まだやってたんだ。」

ぼくは、しんちゃんに誘われたときのことを思い出した。あの時はもうあきらめていたんだけど、こんな形で見ると。変なの。

やがてもう一度歓声が上がると、今度は人が乗った凧が浮き上がった。凧に乗っているのは、さつきケーブルカーで乗り合わせた男だった。男の乗った凧の太い綱の端には連れの女がいて、地上に固定された大きなウィンチを操作している。男はマイク

を手に持って、何かを歌っている。でも何を歌っているのかは分からない。回りの人たちが妙に盛り上がっているのに女は不敵な表情で突っ立っている。サングラスで表情が見えない。

ぼくは大の字になって空の風を見ていた。半ズボンの太ももの裏が、湿った土に少し冷たかったけど、どうでもよかった。黒い半ズボンも、白いシャツも、汚れちゃうな。でもそんなこと、かまわない気がした。ぼくはいつの間にか、少し冷たい風と暑い太陽の下で右腕を目の上に乗せて眠っていた。

「ユキちゃん。」

誰かがぼくの手を取った。ぼくははっとして目を開けた。カスミだった。

「あ、カスミちゃん」

「どうしたの、ユキちゃん」

「何でここが分かったの？」

カスミは、白い生成りの麻のワンピースにサンダルを履いて、口紅も何もさしていなかった。カスミはちよつと下を向いて微笑んて言った。

「えっちゃんが学校を休んだのよ。」

「え？」

「それで私、昨日のこともあったから何かあったの
かなって旧市街に行ったの。大聖堂の近くだったユ
キちゃん言ってたから、行けば何か分かるかと思
って。そうしたら海に行ったとき、ユキちゃんと一緒
にいた犬を連れた子がいてね。ユキちゃんのこと聞
いたのよ。そしたら学校が終わったらすぐエリオッ
トの丘に走って行ったって言うから、追いかけてき
たのよ。」

「そうなんだ。」

ぼくは起き上がって、座った。

「こんな芝生も映えてないところに寝転がったら、泥だらけになっちゃうよ。」

カスミはぼくの背中を叩いた。土ぼこりが立った。

「せっかくきれいなのに、汚れたらもつたいないよ。」

ぼくは黙った。

「えっちゃんとかあったの。」

ぼくは立ち上がって展望台の柵まで行った。相変わらず海はきらきらしてる。風がよく見える。そ

のとき、丘の上の方で凧を見ていた人たちがぼくたちの方に何人も降りて来た。

「美術館の方に行こう。」

ぼくたちは白い大理石で出来た美術館に向かつて歩いた。美術館の前には、海の泡から生まれたばかりの美の女神の大理石の彫刻が置かれていた。ぼくたちはその前を通り過ぎて、さらに裏の方に回った。さらに丘を上って、尾根を越えて、下った。そこはヒースの草原になっていた。昨日の植物園の草原より、ずっと広がった。その向こうにはなだら

かな山に、豊かな森が広がっていた。

ぼくたちは草原の中を黙って歩いた。後を振り返ると、尾根の向こうにはもう凧も見えなくなっていた。ぼくたちは二人だけだった。カスミがぼくの肩を抱いた。ぼくは黙って下を向いたまま歩いた。一本の胡桃の木があつて、その下に小さなベンチとテーブルがおいてあつた。

「座ろ。」

カスミが小さな声で言つて、ぼくは頷いた。ぼくたちは隣り合わせに座つて、ヒースの揺れる草原を

見ていた。

「カスミちゃん。」

「何？」

「カスミちゃんは、女の人しか好きにならないって、ほんと？」

カスミはびつくりした顔をした。

「ああ、えっちゃんと言ったのね。えっちゃんたら。」

カスミは右手の人差し指で自分の唇をなでている。

「ねえ、答えてよ。」

カスミはぼくの顔を見て言った。

「それは本当よ。」

カスミはあっさりと認めた。ぼくは何を言ったらいいかわからなかった。

「でもあなたは、とつてもきれいだから、男の子とか女の子とかに関係なくて。ただ、一緒にいたいと思っただのよ。」

カスミは何か、今まで見たこともないようなやさしい笑みを浮かべて、銀色のヒースが揺れるのを見ていた。カスミは何を見てるんだろう。ぼくには分

からなかった。

「ぼくのこと、子どもだから好きなの？」

カスミはちよつと笑った。

「わからない。私、男の子と付き合い合ったことないから。」

「女の子のことは好きなんだ。」

カスミは苦笑いを浮かべた。

「私はそういうこと隠さないから、みんな私が誰と付き合いってたか知ってるのよ。人のことなんかどうでもいいのに。」

「いずみさんだけじゃなくて、画材屋のお姉さんとも付き合ってたの？」

カスミは笑った。

「あの人はそういう人じゃない。どうせえっちゃん全部喋っちゃったんだろうし、あなたにだって隠すつもりはないから言っちゃうけど、私、13歳のときにえっちゃんの同級生に付き合ってくれて言われて、しばらく付き合ったの。その子は女の子しか好きになれない子だった。私もその子のこと好きだったわ。裁判官の娘だね。お家に大きなおじいさんの

古時計があつた。でも一年くらいかしら。なんとなく気持ちがあわなくなつて、ちようどその子のお父さんが転勤になつて、その子も街からいなくなつちやつた。そのころ私、お母さんとよくケンカして、その子の家に泊めてもらつたりしてた。でもその子がいなくなつちやつたから、行き場がなくなつて。あの喫茶店で遅くまでぼーっとしてたら、心配したマスターが下の画材屋さん頼んでくれて、泊めてもらったの。いい人よ。それからときどき、おうちに泊めてもらつたり、着替えさせてもらつたり、荷物を

置かせてもらったり、長い時間一緒におしゃべりしてくれたりして、とても仲良くなったの。でもあの人には、ちゃんと男の恋人がいるのよ。船乗りで、一年のうち半分はうちにいないの。今度帰ってきたら結婚するんだって張り切ってたわ。」

「いずみさんは…」

「その前に何か食べない？私、学校早退してきちゃったからお弁当食べてない。ユキちゃんも何も食べてないでしょ？」

「うん。」

「半分分けてあげるわ。」

カスミは大きな袋の中からサンドイッチの包みと水筒を出した。水筒には、温かい紅茶が入っていた。

「ちよつと寒くなつちやつたでしょう。」

カスミは小さなカップを取り出し、紅茶を注いでぼくにくれた。確かにぼくは冷えていたし、おなかが減っていた。今まで全然気がつかなかったのだけだ。

ぼくは全粒粉の茶色っぽいパンにトマトとレタス

とベーコンを挟んだサンドイッチを一つ食べて、少し
気持ち落ち着いた。カスミはゆっくり、その半分
を食べた。そしてぼくからティーカップを受け取り、
紅茶を注いで飲んだ。

「ちよつと温かくなつたね。」

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

「それでいずみさんは…」

「あなたの前でいずみちゃんのことというの、ちよつと
抵抗あるんだけど。気にしない？」

「わかんない。気にするかもしれないけど。」

「でも聞きたい？」

「うん。」

ぼくは下を向いて頷いた。

「あなたがイヤな思いをしなけばいいんだけどね。いずみちゃんと付き合い始めたのはもう一年半くらい前かしら。あの人は私たちの学校の卒業生で、市役所に勤めていて、みんな憧れてた。私はあんまり興味なかったんだけど、向こうから誘ってきたのね。学校主催のパーティーで女の子どうし踊るん

だけど、いずみちゃんが私を指名したの。みんな期待してたから、ちよつと恨まれたみたい。えっちゃんもしばらく口をきいてくれなかったもの。」

カスミは下を向いて少し笑った。

「でもおままごとみたいなものよね、そんなの。私最初は、いずみちゃんと付き合う気なんかなかった。でも図書館の前で、あの人私のこと待っていて。何度か一緒にお茶を飲んだりしているうちに付き合い合ってもいいかなって思って。そんな感じよ。」

ぼくは黙って聞いていた。えっちゃんとカスミが話

すところを見たときのような、よく知らない眩しいような世界がそこにある気がした。

「でもね、なんとなく、ちよつとあれって思うことが多くて。」

「あれって？」

初めて口を挟んだぼくに、カスミはちよつとぼくの方を見て、続けた。

「なんていうのかな、すごく急いでの感じがしたの。私を早く大人にしたくて、急いでる。私、最初はそれでもいいと思った。でも、あの人のそういうことに

応えている間に、だんだん自分の気持ちとあわな
いものを感じてきて。私は16歳なんだもの。子ど
もじゃないけど、いずみちゃんが求めてるような大
人じゃない。いずみちゃんについてったら、私が今大
事にしたいものも自分の前をただ通り過ぎて行っ
てしまつて、二度と自分のものにならない。そんな
気がしたの。だからあの日、あなたと海で会った日、
あの人とケンカして、お別れしたの。」

お別れ。ぼくはなんとなくシヨックを受けた。ぼく
とカスミが分かれる日も、やっぱり来るんだらう

か。

「ごめんね、なんか自分がもつとゆつくり大人になりたいなんて言っておきながら、あなたにはこんな話しちやつて。なんか矛盾してるし、ずるいな、私。」

「別にずるくないよ。」

ぼくはぽつつと言った。

「そう？」

「だって、ぼくが話してって言ったんだもん。」

「ごめんね。」

「謝らないでよ。」

ぼくたちの真上で、大きな鷹がすうっと円を描くのが見えた。

「でもね。これはわかって。」

ぼくはカスミの顔を見た。

「私、あなたのこと好きよ。3年経って、あなたが子どもじゃなくて男の子になって、そのときにあなたのことまだ好きかどうか、分からないけど。でも、あなたのこと、好きよ。今のあなたが。」

「ぼくも好きだよ。カスミちゃんのこと。だから。」

「だから…?」

「ぼくを子ども扱いしないで。」

ぼくはのどがからからになる気がした。カスミは両手で、ぼくの両頬をなでた。そしてぼくのことを抱きしめた。カスミの胸の感触を、ぼくの胸で感じた。ぼくは、気持ちやすうつと遠のいていく感じがした。カスミの息遣いが聞こえた。

ぼくはうっとりした気持ちになった。このままずっとこうしていられればいいのと思った。カスミはゆっくり、ぼくの頭をなでた。お母さんみたいだ、とぼ

くは思った。えっちゃんも頭をなでてくれることはあるけど、でもどこかお母さんとは違っていた。カスミになでてもらうと、不思議に安心感があった。でもお母さんではないんだ、とぼくは思った。ぼくは女の人に頭をなでてもらっている。どういふことなんだろう。ぼくはふわふわした気持ちになった。

「いい子」

そういわれて、ぼくは悪い気がしなかった。カスミはゆっくりと、ぼくの頭を自分の胸に持ってきた。ぼくはカスミの胸に頭をうずめた。頭の中にかかっ

ていた霧が晴れていくような感じがした。

「カスミちゃん」

「よしよし」

「赤ちゃん扱いしないでよ」

「私の赤ちゃん」

そういわれて、ぼくは悪い気がしなかった。頭の中にとまっていたたくさんの留め金が、一つ一つ外れていくような気がした。

「ユキちゃん」

ぼくはカスミの瞳を見た。カスミの瞳は、ぼくの中

の何かを見て、少し震えていた。ううん、あれは潤んでいたというのかもしれない。ぼくの両頬に掌を当てて、ぼくの唇に唇を重ねた。

「――あ」

声にならなかつた。優しい唇の感触。ふんわりしていた。唇に唇を重ねることが、こんなに気持ちがいいなんて。今までかいたことのない、カスミの奥にある火のような匂いと、味わったことのないほてった味が、ぼくの中に入ってきた。ぼくたちはまるで、新しい生き物になったみたいだった。

ぼくは思わず知らず、唇の隙間から舌を出して、カスミの唇に触ろうとした。そこにはカスミの唇はなく、生き物のようなカスミの舌がぼくの舌をなでた。ぼくは思わず肩をすぼめて、深い息を吸った。それと同時に、カスミの舌がぼくの中に入ってきた。

どのくらい長い時間、ぼくたちはそうしていたのか分からない。ほんの数分だったのかもしれないし、一時間だったのかもしれない。太陽は止まっていた

のかもしれないし、いつの間にか西に動いていたのかも
もしれなかった。夢を見ているような気がした。

ぼくは唇が見た夢の中で、知らない緑の草原に、
二つの建物がぼつりと立っている風景が見えた気が
した。どこかで見たような、でもはじめてのよう
な、懐かしいような、でも決して見たことのない風
景だった。ぼくはここから来たような気がする。確
かにぼくはそう思ったのだけど、夢のようにその風
景は消えていた。

どちらからともなくぼくたちは唇を離し、もう一度抱き合った。そして立ち上がって、美術館の方に戻って行った。カスミはぼくより10センチ背が高い。ぼくは早く追いつきたいと思った。美術館は風の中に立っていた。もう凧揚げは終わっていて、ケールカーもあと30分来ないということが分かった。ぼくはカスミの手を握っていたけど、言いようのない幸せと、言いようのない不安を一緒に感じていた。

大聖堂のある街で 第5話 カスミの秘密

<http://p.booklog.jp/book/45052>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45052>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45052>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.